

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	松 島 弘 枝
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
<p>韓国人日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程 —漢字と語彙の習熟度，学習環境の違いに着目して—</p>			
論文審査担当者			
主 査	教 授	松 見 法 男	
審査委員	教 授	畑 佐 由 紀 子	
審査委員	教 授	宮 谷 真 人	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は，韓国語を母語とする日本語学習者（以下，韓国人学習者）を対象に，視覚呈示された日本語漢字単語の処理過程を解明することを目的とした。具体的には，日本語漢字単語の処理において，母語である韓国語の漢字知識がどのような影響を及ぼすのかを調べ，母語の漢字知識や日本語漢字の処理経験の多寡による日本語漢字単語の処理過程の変容について検討した。実験では，日本語の漢字と語彙の習熟度や学習環境が異なる韓国人学習者を対象に，韓国語と日本語（以下，韓日）の形態（字体）・音韻類似性，及び単語タイプ（同根語，非同根語）を独立変数として操作し，読み上げ課題と語彙判断課題における反応時間を従属変数とした。</p> <p>論文の構成は，以下のとおりである。</p> <p>第1章では，韓国人学習者が中国語系学習者（中国語を母語とする中国，台湾，香港の日本語学習者）とは異なる日本語漢字の処理過程を有する可能性について述べた上で，韓国の漢字使用状況を分析し，第二言語の単語認知過程に関する先行研究と韓国人学習者を対象とした漢字研究を概観した。先行研究からは，韓国人学習者において日本語の漢字と語彙の習熟度が上がると，韓国語の漢字知識が増えることや，母語の漢字知識が豊富な韓国人学習者は，中国語系学習者と類似した日本語漢字の処理過程をもつことが示唆された。しかし，韓国人学習者が日本語漢字を処理する際の母語の影響については，未だ実験的検討が不十分であり，心内辞書内の基本的な表象関係も不明であると言える。</p> <p>第2章では，第3章以降の実験で用いる材料の選定基準を明確にするため，日本語の未習者と既習者を対象に，日本語の1字漢字と2字漢字単語に関して，韓日の形態・音韻類似性を7段階で評定させる調査を行った。その結果，1字漢字437個の形態・音韻類似性と，2字漢字単語654個の形態類似性，及び2字漢字単語435個の音韻類似性を測定・数値化することができた。</p> <p>第3章では，視覚呈示された日本語1字漢字の処理における韓日の形態・音韻類似性の影響を，読み上げ課題を用いて検討した。実験1では，日本語の漢字と語彙の習熟度が異なる韓国在住の学習者を対象とし，実験2では日本在住の学習者を対象とした。その結果，形態類似性については，日本語の漢字と語彙の習熟度が上がり，母語の漢字知識が豊富に</p>			

なると、抑制効果がみられることが明らかとなった。音韻類似性については、日本語の漢字と語彙の習熟度が低い段階から促進効果がみられるが、日本語漢字の処理経験が豊富になると、音韻類似性が低い漢字の処理も迅速に行われることが示された。

第4章では、視覚呈示された日本語2字漢字単語の処理における韓日の形態・音韻類似性の影響を、日本語の漢字と語彙の習熟度が異なる韓国在住の学習者及び日本在住の学習者を対象として検討した。実験3, 4では読み上げ課題を、また実験5, 6では語彙判断課題を、それぞれ採用した。その結果、形態類似性については、いずれの実験においても、促進または抑制の効果がみられなかった。日本語の2字漢字単語では、形態が類似する漢字であっても、1字漢字ほどには厳密に区別して処理を行う必要がないため、母語の漢字知識が豊富になり、韓国語漢字の形態表象の形成度が上がっても、表象内における個々の漢字の鮮明度が1字漢字よりも低いことが推測された。他方、音韻類似性については、読み上げ課題を用いた実験で促進効果がみられたが、語彙判断課題を用いた実験では促進・抑制効果がみられなかったことから、音韻類似性の促進効果は、音声出力が要求される場合にのみ生じることが明らかとなった。

第5章では、視覚呈示された日本語2字漢字単語の処理における韓日の単語タイプ（同根語、非同根語）の影響を、日本語の漢字と語彙の習熟度が異なる韓国在住の学習者及び日本在住の学習者を対象として検討した。材料はすべて音韻類似性が低い漢字単語であった。実験7, 8では読み上げ課題を、また実験9, 10では語彙判断課題を、それぞれ採用した。その結果、同根語の促進効果が、日本語の音声出力を要求されない語彙判断課題において、日本語の漢字と語彙の習熟度にかかわらずみられた。同根語は母語の音韻表象を経由して処理されると解釈できる。他方、母語の漢字知識が豊富な学習者では、読み上げ課題でも同根語の促進効果がみられ、音韻類似性が低い単語でも、韓日の音韻表象を経由した処理が迅速に行われることが示唆された。

第6章では、実験1から実験10までのまとめを行い、その結果と、先行研究における中国語系学習者の結果とをふまえて、韓国人学習者における日本語漢字単語の心内辞書モデルを構築した。そして、本研究の意義と発展課題について述べた。

本論文は、以下の3点で高く評価できる。

1. 日本語の1字漢字と2字漢字単語について、韓日の形態類似性及び音韻類似性を調査して数値化し、同種の実験に活用できる貴重な基礎資料をまとめた。
2. 「誰が、何を、どのように学習するか」の観点から、日本語の漢字と語彙の習熟度や学習環境が異なる学習者を設定し、日本語漢字における韓日の形態・音韻類似性及び単語タイプを操作して、読み上げと語彙判断の両課題を採用する体系的な実験を行った。
3. 韓国人学習者における日本語漢字単語の処理過程を中国語系学習者のそれと比較・吟味し、形態・音韻・概念表象の相互関係に基づく心内辞書モデルを提案した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成26年10月22日